

小・中学生の音楽行動について（Ⅱ）

杉山知子

はじめに

拙稿¹⁾においては、岡山県北部のM小学校とM中学校の生徒の音楽行動及び音楽の授業に対する意識などについて調査した。その結果、小学校高学年から中学生においては、聴取行動の積極性が増すなど、おおよその全体像が明らかにされた。

本論では、新たに調査した岡山県南部の4つの中学校についての結果を、M小学校、M中学校の結果と共に報告する。

集計においては次の3点に視点を置いた。

- 1) 地域環境のちがいがい
- 2) 音楽に対する意識の差と音楽行動の関係
- 3) 小学校高学年から中学生にかけての学年差

以上より、子どもの音楽に関する意識や音楽行動を考察する。

I. 調査対象校、環境及び調査内容

調査対象校、調査人数及び調査の時期は表1の通りである。

表1

調査対象校	学 年	人 数	調査時期
M小学校	5・6年生	132名	1986年8月
M中学校	1・2・3年生	590名	1988年7月
K中学校	1・2・3年生	287名	1989年7月
C中学校	1・2・3年生	355名	1989年7月
R中学校	1・2・3年生	250名	1989年7月

M小学校とM中学校は岡山県北部の郡部に位置し、商業や観光地域もあるが、全般的には農業地帯である。

K中学校は岡山市の中心部住宅街に位置し、大学なども多く集まっている文京地区にある。

C中学校は岡山市の周辺部に位置し、昔からの住宅街が大部分を占める。しかし、最近では一部地域に団地ができ、C中学校生徒の2～3割はそこから通っているという状況である。

R中学校は岡山市周辺部に位置し、いわゆる新興住宅街の中にある。

T中学校は玉野市内にあり、大企業の社宅が多い地域である。

調査内容は次の通りである。

- ・ 日常の音楽行動に関する項目
 1. 学校外で歌をうたうことがありますか。
 2. 学校外で何かの楽器を演奏することがありますか。
 3. 家族と一緒に楽器を弾いたり、歌をうたったりすることがありますか。
 4. 友だちと音楽の話をすることがありますか。
 5. 家族と音楽の話をすることがありますか。
 6. 音楽会に出かけることがありますか。
 7. レコードや音楽テープ、CDを聴くことがありますか。
 8. 自分の好きなレコードや音楽テープ、CDを買ったことがありますか。
 9. 友だちとレコードや音楽テープなどの貸し借りをすることがありますか。
 10. ラジオやテレビの音楽番組を聞いたり見たりすることがありますか。
 11. 音楽の事がのっている雑誌や本を読むことがありますか。
 12. 自分で作詞や作曲をしたことがありますか。
- ・ 音楽の嗜好に関する項目
 13. 「学校音楽」と「学校外音楽」について、次のうちのどれですか。
 1. 学校で習う音楽が好き
 2. 学校以外の音楽が好き
 3. 両方好き
 4. 両方嫌い
- ・ 音楽の授業に関する項目
 14. 学校の科目の中で好きなものを三つにマルをつけてください。
国語 社会 数学 理科 英語
美術 体育 音楽 技術・家庭
 15. 歌をうたうことについて
 16. 楽器を演奏することについて
 17. 音楽を作ることについて
 18. レコードなどで音楽を聴くことについて
 19. 楽譜・音符などの勉強することについて

なお、学校差、学年差など「差」については、カイ2乗検定の結果、5%水準で有意差のある場合に限っている。

II. 学校差

各項目別に5つの中学校を比較するため、有意差の検定(χ^2)を行った。その結果、5%水準の危険率で有意差のある場合を>で表し、差のない場合は=で表した。(表2)

表2 学校間の差

項目	学校
1. 学校外で歌をうたう	C>R=T=M=K
2. 学校外で楽器を演奏する	K=C=R=T=M
3. 家族と一緒にうたう	K=C=R=T=M
4. 友だちと音楽の話をする	C>R=T>K=M
5. 家族と音楽の話をする	K=C=R=T=M
6. 音楽会に行く	C=R=K>T=M
7. 音楽テープ・CD等を聴く	C=R=K>T=M
8. 音楽テープ・CD等を買う	K=C=R=M>T
9. 友だちと音楽テープ等の貸し借りを する	K=C=R=T=M
10. テレビの音楽番組を見る	K=C=R=T=M
11. 音楽関係の雑誌・本を読む	K=C=R=T=M
12. 作詞・作曲をする	K=C=R=T=M
13. 学校音楽・学校外音楽について	C, K=M, T=R
14. 授業の音楽について	C=M>R=K>T
15. 授業で歌をうたうこと	C=M>K=R=T
16. 授業で楽器演奏すること	C>T=K=R=M
17. 授業で作曲すること	C=R=M>K=T
18. 授業で音楽を聴くこと	C=M=T>K=R
19. 授業で楽譜の勉強すること	K=C=R=T=M

表2において、項目1から12は音楽行動に関するもの、項目15から19は音楽授業に対する意識についてである。それぞれ「よくある」、「やりたい」という積極的な姿勢の生徒が多い学校が、>の記号の左側に位置している。

項目14は音楽科目が好きかどうか、つまり音楽科目を支持するかどうかである。好きな上位3科目の中に音楽を入れている場合を支持するとみなし、支持する生徒数を表している。

項目13は、「学校音楽」、「学校外音楽」についてである。

1. 学校音楽が好き, 2. 学校外音楽が好き, 3. 両方好き, 4. 両方嫌い, の4つに分けた場合、どれ

を選択するかというものである。他の項目のように積極性を判断できるものではない。従って、4つの選択数のバラつきについて有意差を検定した。その結果、バラつきが3つのグループに分かれたことを表2で示している。すなわち、KとMのグループ、TとRのグループ、そしてCの3つである。

表2より、19の項目の中で差の認められるのは11項目、差の認められないのは8項目である。これは予想外に差が少ない。特に行動面においては、12項目中、5項目に差が認められ、7項目においては差が認められない。差の認められる5項目についてみる。

「友だちと音楽の話をする」において、差が3段階になっており、全項目の中で最もバラつきが多い。

しかし、この差は都市と田舎という地域差とはいえない。なぜならば、都市と田舎の差が最も大きいと考えられるK中学校(岡山市中心部)とM中学校(郡部)のバラつきが同じなのである。

地域差として認められるのは、「音楽会に行く」、「音楽テープ・CDなどを聴く」である。この2項目ともTとMより都市であるC・R・Kにおいて行動が多い。しかし、それ以外に差のある項目、「学校外で歌をうたう」、「音楽テープ・CD等を買う」では地域差とは考えにくい。

以上、中学生の音楽行動は地域の特性と深く結びついているとはいえず、むしろ、地域には関係なく、平均化しているといえる。これは、テレビ・ラジオなどマス・メディアの普及と音楽テープやCDなどの入手の手軽さによる、音楽文化の均一化が要因ではないかと考えられる。すなわち、都市と田舎における音楽文化には差がない。

音楽科目を支持するかどうか(項目14)については学校差が見られる、さらに、この学校差は音楽の授業に対する意識(項目15~18)において、ある程度反映されている。すなわち、項目15~18においては、「やりたい」という生徒の多いのは音楽科目支持の多いCとMなのである。CとMが授業に対して他より積極的であることは項目13からもいえる。

項目13は「学校音楽」、「学校外音楽」についてであ

るが、表2のようにバラつきが3つのグループに分かれる。表3は、項目13について具体的な集計数値で示した。MとKをグループ1、RとTをグループ2、Cをグループ3とし、グループ2を他との比較で述べると次のようにいえる。

3つのグループとも、「学校音楽のみ好き」という生徒は少ない。特にグループ2は他より著しく少ない。さらに、グループ2は「学校外音楽が好き」な生徒は最も多く、両方とも好きという生徒は最も少ない。

このように、グループ2の音楽嗜好は、学校音楽ではなく、学校外音楽にあるといえる。

表2の授業に対する意識(項目15~18)において、C・Mに比べてR・Tの方が積極的でないのは、RとTのこのような音楽嗜好も要因となっている。

以上、音楽科目に対する意識や「学校音楽」、「学校外音楽」など、音楽嗜好は音楽行動にも影響を与えられ考えられる。

Ⅲ. 音楽嗜好と行動・意識

音楽嗜好に関する質問は、項目13「学校音楽・学校外音楽のどれを好むか」である。

「学校音楽のみ」支持者85名(5%)、「学校外音楽のみ」支持者995名(56%)、「両方」支持者524名(29%)「両方支持しない」者155名(9%)である。音楽行動、及び、音楽の授業に関する質問項目において、「よくある」、「やりたい」と答えた生徒について、音楽嗜好別に数値で示した。(表4)

表4は、項目1「学校外で歌をうたう」を例にとると、「よ

表3 「学校音楽」「学校外音楽」について

	中学校	学校音楽 が 好 き	学校外音楽 が 好 き	両方好き (524名)	両方嫌い (155名)
グループ1	M(590名)	42名(7%)	296名(50%)	189名(32%)	52名(8%)
	K(287名)	13 (5)	164 (57)	82 (29)	26 (9)
グループ2	R(252名)	5 (2)	156 (62)	62 (25)	24 (10)
	T(299名)	7 (2)	194 (65)	58 (19)	35 (12)
グループ3	C(355名)	18 (5)	185 (52)	133 (37)	18 (5)

くある」生徒は474名、その中で「学校音楽が好き」という生徒は11名である。さらに、この11名は「学校音楽が好き」な生徒85名の13%に当たる、というような見方をする。

全体的に、「両方好き」とする生徒の比率が高い。すなわち、「両方好き」な生徒は「よくある」、「やりたい」という積極的な姿勢である。

「学校外音楽」支持の生徒は、日常の音楽行動(項目1~12)においては、「両方好きな生徒」の次に比率が高く、積極的である。しかし、授業に対する意欲

表4 積極的な生徒の音楽嗜好

項目	学校音楽が好き (85名)	学校外音楽が好き (995名)	両方好き (524名)	両方嫌い (155名)	よくある 計
1	11名(13%)	244名(25%)	207名(40%)	12名(8%)	474名
2	4 (5)	134 (13)	170 (32)	8 (5)	316
3	1 (1)	20 (2)	35 (7)	0 (0)	56
4	9 (11)	318 (32)	206 (39)	6 (4)	539
5	2 (2)	91 (9)	109 (21)	2 (1)	204
6	4 (5)	29 (3)	51 (10)	2 (1)	86
7	38 (45)	747 (75)	400 (76)	38 (25)	1223
8	20 (24)	493 (50)	235 (45)	27 (17)	775
9	15 (18)	423 (43)	205 (39)	9 (6)	652
10	33 (39)	603 (61)	339 (65)	25 (16)	1000
11	9 (11)	310 (31)	192 (37)	9 (6)	520
12	0 (0)	32 (3)	38 (7)	1 (1)	71
					やりたい 計
15	24 (38)	163 (16)	291 (56)	10 (6)	488
16	29 (34)	245 (25)	295 (56)	12 (8)	581
17	8 (9)	107 (11)	105 (20)	4 (3)	224
18	48 (56)	592 (59)	400 (76)	30 (19)	1070
19	6 (7)	64 (6)	108 (21)	1 (1)	179

に関して(項目15~19)は、「学校音楽」支持者の方が「学校外音楽」支持者より比率が高く、積極的である。このように、音楽嗜好の差により、日常の音楽行動と授業に対する意欲において、積極性が逆転する。さらに、歌をうたう、楽器を演奏する、という表現活動においても、音楽嗜好の差が学校内と学校外で明確に分かれる。すなわち、学校内(授業に対する意欲)では「学校音楽」支持者が積極的なのに対し、学校外(日常の音楽行動)では、「学校外音楽」支持者が積極的である。このような学校内・外の差は、「学校唱歌校門を出ず」という明治以来の言葉を連想させられ、後に述べる、学校音楽文化対生徒音楽文化として捉えられる²⁾。

授業に対する意欲に関しては、「学校音楽」支持者が積極的である。その中で、「授業で音楽を聴く」ことに対しては「学校外音楽」支持者も高い比率で、「やりたい」と思っている。聴取活動は中学生の音楽行動の中心となっているが、授業においても、音楽を聴く活動は比較的受け入れられやすいことを示すものである。

次に、項目14より授業科目として音楽の位置づけをみる。科目として音楽の好きな生徒は670名(38%)、好きではない生徒1112名(62%)である。この音楽科目支持、非支持は音楽行動や授業意欲のすべてに渡って0.1%水準で有意な差が見られた。すなわち、音楽科目の好きな生徒は積極的な行動や態度を示す。これは当然予想されることではあるが、項目1. 2. 13. 15. 16においては、特に大きな差が見られた。

表5 「学校音楽」「学校外音楽」について

	音楽科目が好き (670名)	音楽科目が好きではない (1112名)
学校音楽が好き	38名(6%)	47名(4%)
学校外音楽が好き	272(41)	723(65)
両方好き	344(51)	180(16)
両方嫌い	11(2)	144(13)

表5は音楽科目の支持、非支持と項目13(音楽嗜好の別)、表6は音楽科目の支持、非支持と項目1. 2. 15. 16をそれぞれクロスさせた結果である。

表5より、音楽科目の好きな生徒は、学校音楽のみを支持するのではなく、学校音楽も学校外音楽も両方とも支持する。それに対し、音楽科目の好きではない生徒は、学校外音楽のみを支持する場合が圧倒的に多い。

表6に挙げられた項目は、歌をうたう、楽器を演奏する、という表現活動に関するものである。音楽科目を支持する生徒は、日常生活においても、授業においても、表現活動に対して積極的な態度である。

表6に挙げられていない、聴取活動(CDや音楽テープを聴く)においても、音楽科目が好きかどうかによる差は認められる。しかし、表現活動における差の方

表6 音楽科目の支持・非支持と音楽行動や意識

	音楽科目が好き(670名)	音楽科目が好きではない(1112名)
1. 歌をうたうこと		
1. よくある	267名(40%)	207名(19%)
2. ときどきある	252(38)	400(36)
3. ほとんどない	145(22)	498(45)
2. 楽器を演奏すること		
1. よくある	215(32)	104(9)
2. ときどきある	158(24)	176(16)
3. ほとんどない	296(44)	827(74)
15. 授業で歌をうたうこと		
1. やりたい	319(48)	170(15)
2. どちらともいえない	298(44)	602(54)
3. やりたくない	52(8)	338(30)
16. 授業で楽器を演奏すること		
1. やりたい	340(51)	243(22)
2. どちらともいえない	220(33)	458(41)
3. やりたくない	108(16)	410(37)

が非常に大きい。

法岡氏は、中学生の音楽行動について次のような分析³⁾をしている。

「第1に、中学生の音楽行動タイプは、〈表現中心家族志向型〉〈聴取中心友だち志向型〉〈消費型〉の3つに大きく分けられ、その中で中学生の時期の特徴として注目すべきことは、仲間集団の中で形成される〈聴取中心友だち志向型〉の音楽行動タイプが大きな位置を占めてくることである。第2に、〈聴取中心友だち志向型〉を示す中学生には、学校音楽よりも学校外音楽が好きと答える者が多く、しかも学校の「音楽」の成績の良し悪しとは殆ど関係がないことから、この音楽行動タイプは、学校文化と対立する生徒文化としてとらえられる。第3に〈表現中心家族志向型〉は学校音楽、学校外音楽の両方を好きとする中学生が多く示す音楽行動タイプであり、家族志向は同時に学校文化への適応をあらわしているともいえる。第4に、〈聴取中心友だち志向型〉と〈表現中心家族志向型〉は対極にある音楽行動タイプでありながら、音楽行動における積極性という意味では同程度の水準を示しており、中学生の音楽文化として、学校音楽と対置する生徒音楽文化の存在を無視できない。」

以上の法岡氏の分析により、今回の調査結果は調査対象校独自のものではなく、一般的な中学生の音楽嗜好と音楽行動の関係として捉えられる。

IV. 学年差

小学校5年生から中学校3年生までの各学年を比較した。これは地域に関係なく、同学年ごとに集計したものであるが、その結果、学年による順次変化のある項目、小学生と中学生で差のある項目、学年別の差のない項目、各学年が無関連に変化している項目に分けられた。

学年による順次変化では、学年が上がるに従い行動が多くなる「積極性順次増加型」の項目と、逆に、学年が上がるに従い行動が少なくなる「積極性順次減少型」の2種類に分けられる。

「積極性順次増加型」は次の6項目であり、この型の項目が全体の中で最も多い。

- 項目4. 友だちと音楽の話をする。
- 7. CDや音楽テープを聴く。
- 8. CDや音楽テープを購入する。
- 9. CDや音楽テープを貸し借りする。
- 11. 音楽関係の雑誌や本を読む。
- 13. 学校外の音楽が好き

これら6項目に共通していえることは、授業への要望ではなく、日常生活に関わること、さらに、学校で習う固いイメージの音楽ではなく、情報としての軽い音楽への接近である。

若者に固有の関心情報は「音楽」、「ファッション」を始めとして、「快いもの」、「楽しいもの」、「美しいもの」である、という分析⁴⁾がなされている。

ここでいう若者とは16歳から24歳を指しているが、その年齢に近づきつつある小・中学生において同様に認識されている。

「積極性順次減少型」は、項目14の「学校音楽が好き」が該当する。すなわち、学校外音楽との相対的な関係により当然のことであろう。

次に、小学生と中学生で差の認められる項目については、行動の多さにより、小学生の方が積極的である「小学生活動型」と、中学生の方が積極的である「中学生活動型」に分けられる。

「小学生活動型」は、項目2の「学校外で何かの楽器を演奏する」及び項目3の「家族と一緒に歌ったり演奏する」である。この2項目とも小学生の方が積極的ではあるが、中学生に比べれば積極的という程度であり、「よくある」が多いというわけではない。

「中学生活動型」は、項目1・10の2つである。すなわち、「学校外で歌をうたう」「テレビ・ラジオの音楽番組を見たり聴いたりする」である。

「学校外で歌をうたう」は、中学生で急増する聴取行動に伴う行動として考えられる。

テレビ・ラジオの視聴に関しては次の調査がなされている。

まず、視聴時間⁵⁾について、厚生省児童家庭局の調査によれば、小学校5年生から中学校3年生の一日のテレビ視聴は次の通りである

ほとんど見ない……………	5.5%
1時間未満……………	9.7%
1時間以上2時間未満……………	32.5%
2時間以上3時間未満……………	29.3%
3時間以上……………	22.0%

一日に2時間以上の長時間見る子どもが過半数を占

め、子どもの生活におけるテレビの影響は強い。さらに、視聴内容について、全国子ども劇場おやこ劇場連絡会の調査では、よく見る番組は、小学生がアニメ・バラエティ番組、中学生が歌番組となっている。これらは、テレビなどの音楽番組聴取における小・中学生の差を裏付けるものである。

以上、小学生・中学生の音楽行動においては、中学生の方が活発になり、しかも、個人選択の可能なCDや音楽テープなどによる音楽聴取が学年と共に増すという結果が得られた。

次に、各学年ともほぼ同じで差のない項目(5. 12. 15. 18)、各学年が互いに関連なく変化している項目(13. 16. 17. 19)があげられる。これらはほとんどが音楽の授業に関するもの、すなわち、「授業で歌をうたう」、「授業で音楽を聞く」、「授業で楽器を演奏する」、「授業で作詞・作曲をする」、「授業で楽譜や音符の勉強をする」というものである。

日常の聴取行動においては、成長に伴う変化が見られた。しかし、授業に対する要望においては、成長・発達ということは考えにくい。

そういった観点ではなく、その学校・学年・クラスひいては個々の生徒の個性とでもいうべき要素により左右されやすいと考えられる。

V. まとめ

小・中学生の音楽行動については次のように要約できる。

- 1) 音楽行動における地域性は明確ではない。
- 2) 学校外音楽への興味が音楽行動の原動力となる。
- 3) 音楽行動は、学年が上がるに従い順次進行的に増す。

1) について

今回は地域を広げて調査した。それは、音楽が地域性と密接な関わりをもつと考えたからである。

しかし、今回の調査からは、音楽行動の地域性といえるものは明確とはならなかった。テレビ・ラジオなどマス・メディアの普及とCDや音楽テープの氾濫、それらの前提となる交通網の整備や車社会の実現によ

り、文化的区別が都市と田舎という地域性では考えにくくなってきているためと考えられる。

もし、文化の差について調査するとしたら、都市と田舎という条件をもっと極端に差のある地域で考える必要がある。

地域と文化を結びつけての学校差は認められないがそれは、学校差がないということではない。II章で述べたように、学校差は半数以上の項目において認められる。ただ、それは地域の特性を強く反映したものである、ということである。

2) について

音楽嗜好と音楽行動の関係については、「学校外音楽」の好きな生徒の方が、「学校音楽」の好きな生徒に比べて、音楽行動は積極的である。

小学校5・6年から中学生にかけては、マス・メディアの影響が強く、それが「学校外音楽」に目を向けさせる要因となる。しかも、その「学校外音楽」が音楽行動を引き起こす原動力になっているのである。

「学校音楽」支持者の行動を「学校音楽文化」として捉えるならば、「学校外音楽」支持者の行動は「生徒音楽文化」として捉えられ、学校音楽教育の上で、無視できない大きな存在である。

3) について

音楽行動の学年差については、小学生よりも中学生の方が行動が多くなり、しかも、1年生よりも2年生、2年生よりも3年生というように、学年が上がるに従って行動も多くなる。さらに、音楽行動の中身は「聴取」が中心であり、聴取行動に付随して別の行動をも引き起こしている。

聴取メディアは、小学生はテレビなどが主である。中学生はテレビなども多いが、CDや音楽テープなどが急増する。それに伴って、音楽テープなどの友だちとの貸し借りや購入が増える。このように日常生活において、音楽行動は急激に増えるのである。

小学生から中学生にかけての聴取メディアの変化は単に手段が変わっただけではなく、二つの大きな意味をもつと考えられる。

第一は聴取態度の変化である。テレビからの音楽聴取

は、自分の意志にはあまり関係なく、ただ流れてくる音楽を聴くという受動的な要素が多分にある。しかし、CDや音楽テープの場合には、自分の意志が存在する。音楽テープなどの貸し借りや購入における選択行為、すなわち、自分の好きな曲を選ぶことは、自分の意志で音楽を聴こうとする積極的な聴取態度である。

第二は社会的成長とでもいえる変化である。テレビを見る行為は、友だちとは関係がなく、自分一人で音楽を楽しむことである。しかし、音楽テープなどの友だちとの貸し借りは、友だちと音楽を共有することにつながる。音楽テープを媒介として、友だちとコミュニケーションするのである。

以上のように、小学校5・6年から中学生にかけては精神的な変化が大きい。すなわち、こどもからおとなへの精神的成長の時期に当たると考えられ、この時期に「生徒音楽文化」が成立する。

「生徒音楽文化」は学年が上がるに従い生徒間に広まり、音楽行動にも大きな影響を与える。従って、音楽教育を考える上で、生徒音楽文化との関わり方は非常に重要となり、課題になるものと考えられる。

上げます。

(1990年12月1日受理)

<引用文献>

- 1) 杉山知子, 小・中学生の音楽行動について (I), 美作女子大学・同短期大学部紀要第34号, 1989年, pp. 24~30
- 2) 法岡淑子, 中学生の音楽行動, 音楽教育学第14号, 1984年, p.84
- 3) 法岡淑子, 前掲書2)
- 4) NHK世論調査部編, 『情報・社会・人間』, 日本放送出版協会, 1987年, pp.36~40
- 5) 日本総合愛育研究所編, 『1988/89 日本子ども資料年鑑』, 中央出版, 1988年, p.330
- 6) 日本総合愛育研究所編, 前掲書5) p.331

<付記>

本研究においてご助言いただきました就実短期大学の藤井貞子先生, 虫明泰子先生, 岡山大学の松田幸子先生, 調査にご協力いただきました対象校の皆様には厚く感謝申